



鈴木香子著

機能文型に基づく相談の談話の構造分析

早稲田大学出版部、2009 年発行、11a345p、11b234p.

11a ISBN : 978-4-657-09302-8 C3381

11b(相談の談話資料集) ISBN : 978-4-657-09303-5 C3381

ポリー ザトラウスキー

本書は、2007 年 6 月に提出して、9 月に学位を取得した早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文『機能文型に基づく相談の談話の構造分析』（全 593 頁、本文 348 頁、資料集 245 頁）を修正し、出版されたものである。本稿は、本書の概要と意義を述べた後、評価と所感を記すことにする。

1. 本書の概要と意義

本書は、「相談の談話」の「機能文型」に基づく「談話型」を解明するものである。「相談の談話」とは、相談者が自分の現在の状況やそれに対する見解を述べて、専門的知識を提供する回答者に相談し、回答者が要因や解決策等を回答する談話のことである。分析対象はラジオ放送の①医療相談 3 資料 15 件（4,080 発話）と②心理相談 3 資料 9 件（4,757 発話）、③図書館レファレンスの相談の談話 3 資料(1,002 発話)である。

また、「談話型」とは、相談の談話の全体的構造の類型であるが、本書は、相談の談話資料の全体的構造を調査し、【表 1】に示すような相談の「談話型」を明らかにした。

表 1 相談の談話の構造

- | |
|---|
| <p>A. 相談開始の話段</p> <p>B. 相談かけの話段</p> <p> B-1. 相談提示の小話段</p> <p> B-2. 相談内容確認の小話段</p> <p>C. 相談うけの話段</p> <p> C-1. 回答提供の小話段</p> <p> C-2. 回答確認の小話段</p> <p>D. 相談終了の話段</p> |
|---|

鈴木(2009:321)

【表1】の「話段」は、佐久間(1987、2006)の「話段」の概念と、ザトラウスキー(1993)の「勧誘の談話」の「話段」の分析とを導入したもので、参加者の目的と内容上の相対的な大小のまとまりによる談話の成分である。「話段」に、上位単位の「大話段」と、下位単位の「小話段」を設けて、相談の談話における多重構造を解明した。

表2 5類40種の「発話機能」

I.相手に対する呼びかけや、自身の発話に含まれる間投表現			
1 注目要求		2 間投表現	
II.談話表示（佐久間 2002:168）			
A 話題開始機能			
a1 話を始める機能		a2 話を再び始める機能	
B 話題継続機能			
b1 話を重ねる機能		b2 話を深める機能	b3 話を進める機能
b4 話をうながす機能		b5 話を戻す機能	b6 話をはさむ機能
b7 話をそらす機能		b8 話をさえぎる機能	b9 話を变える機能
b10 話をまとめる機能			
C 話題終了機能			
c1 話を終える機能		c2 話を一応終える機能	
III.要求			
*1 確認要求	*2 判定要求	*3 選択要求	*4 説明要求
*5 単独行為要求	6 共同行為要求	7 言い直し要求	
IV.提供			
*1 事実報告	*2 意見説明	*3 感情表出	*4 意志表明
*5 選択情報提供	6 言い直し	7 応答	
V.受容			
1 関係作り・儀礼		2 自己注目表示	
3 相手への注目表示			
a 継続	b 承認	c 否認	d 確認
e 興味	f 共感	g 終了	h 同意

鈴木(2009:78)

また、ザトラウスキー(1993、1997)の「発話機能」を元に、【表2】に示すような相談の談話の「発話機能」を作り上げた。II.「談話表示」は佐久間(2002:168)の「文脈展開機能」全3類14種を用いた。III.「要求」とIV.「提供」の*が付いたものはザトラウスキー(1993)の〈情報要求〉を4種に細分し、〈情報提供〉を5種に再分類した発話機能である。〈情報要求〉を国立国語研究所(1960)のIII-1〈確認要求〉、III-2〈判定要求〉、III-3〈選択要求〉、III-4〈説明要求〉に細分し、〈情報提供〉は、文章・談話論における佐久間(1997)のIV-1〈事実報告〉、IV-2〈意見説明〉、IV-3〈感情表出〉、IV-4〈意志表明〉の4種の発話機能に再分類することで、【表1】の相談の談話の全体的構造を支える発話機能を明らかにしている。

「機能文型」とは、佐久間(2006:2)の「コミュニケーションの実現を支えるための種々の

役割を担う文を中心とした表現の類型（パターン）であり、文章・談話の構成要素となる」という規定によるものである。本書の「機能文型」は、「提題表現+叙述表現の『文』」の型であり、主に叙述表現によって認定した（p.91）という。【表 1】の大小の「話段」を構成する文とその組み合わせを分類している。相談の談話の「B.相談かけの話段」と「C.相談うけの話段」の機能文型には、以下の 4 つの特徴が認められる。

- ①「B-1.相談提示の小話段」：IV-2〈意見説明〉IV-2-3「Nハ、{V}ン{デス}。」相談者・司会者が相談内容を提示する。（p.323）
- ②「B-2.相談内容確認の小話段」：回答者の「要求」と相談者の「提供」が反復する。（p.126）
- ③「C-1.回答提供の小話段」：回答者が「提供」系で回答し、最後に「要求」系のⅢ-5〈単独行為要求〉の機能文型「Vテクダサイ。」等の今後の対処法の指示が現れる。（p.325）
- ④「C-2.回答確認の小話段」：「B-2.相談内容確認の小話段」とは逆に、相談者が回答者に要求する。回答を確認するⅢ-1〈確認要求〉の機能文型が見られる。（p.326）

同じ機能文型を異なる参加者が用いたり、特定の小話段にしか出てこない機能文型もあったりすることから、談話の全体的構造の中で文型を捉えることにより、誰がどのような目的で、どのような文型の発話を用いているのかが捉えられる。（p.326）

また、相談の談話の主要成分である「B.相談かけの話段」と「C.相談うけの話段」は各 2 種類の小話段からなる（【表 1】）。その中で「B.相談かけの話段」の「B-1. 相談提示の小話段」と「B-2. 相談内容確認の小話段」、また「C.相談うけの話段」の「C-1. 回答提供の小話段」は、すべての資料にあるが、その後に「C-2. 回答確認の小話段」が続くか否かが相談の談話型を決めるものとなる（p.323）。つまり、相談者が回答をすぐに納得するものと、回答を確認して終わるもの等により、以下に示す 4 種類に分類される（p.327）。

【談話型 1】B-1. →B-2. →C-1. : 相談者がIV-2〈意見説明〉の「わかりました。」等で、回答に納得し、「D.相談終了の話段」へと展開する最も単純な談話型である。

【談話型 2】B-1. →B-2. →C-1. →C-2. : 「C-1.回答提供の小話段」の後、「C-2.回答確認の小話段」へと進む。相談者が回答を確認し、納得してから終了する。

【談話型 3】B-1. →B-2. →C-1. →C-2. →C-1. : 【談話型 2】と同じく、「C.相談うけの話段」の「C-1.回答提供の小話段」の後、「C-2.回答確認の小話段」へと進むが、相談者が「C-1.回答提供の小話段」で回答に納得せず、さらに別の回答を求める。

【談話型 4】B-1. →B-2. →C-1. →B-2. →C-1. : 「C-1. 回答提供の小話段」の後、「B-2. 相談内容確認の小話段」へと再度進む。回答者が的確に回答するために、前の「B-2. 相談内容確認の小話段」で聞き出せなかったことや、確認したいことを聞く。

本書の意義は、日本語の談話分析と日本語教育に貢献することにある。日本語の談話分析としては、「話段」の多重構造や発話機能の形態面に新しい分析観点を提供している。「相談の談話」の「話段」に上位単位の「大話段」と下位単位の「小話段」を設け、大小の「話段」の多重構造を検証した。また、先行研究における談話機能の〈情報要求〉と〈情報提供〉を再分類している。これらの機能が相談の談話の約 5 割の発話を占めることから、相談の談話をより精密に記述し、「話段」の多重構造と談話型が解明できたといえよう。また、日本語教育としては、従来の教材は発話や文の連続が主に扱われてきたが、本書は、談話の全体的構造を提示し、談話の構成要素（大話段、話段、小話段、発話）の機能や「発話」

の「機能文型」を提示したという点で画期的なものだといえる。

2. 本書の評価と所感

本書では、(1)資料としての重要性、(2)各談話の特性に応じた発話機能の分類と組み合わせの再構成の重要性、(3)談話の種類と参加者の役割、(4)今後の課題を取り上げる。

まず、日本語教育のための談話分析では、ロールプレイの談話の分析が大半で、先行研究の発話機能等をそのまま用いることが多い。しかし、学習者は、日本で会話をする際には実際の談話における自由な発話のやりとりをするために、実際の談話分析が求められる。本書の相談の談話資料は実際に行われた様々な相談の談話であるという点で優れており、その資料の種類に応じる、従来の研究成果と新たに設けた発話機能や機能文型等の分析観点は貴重な成果だといえよう。

各談話の特性に応じた発話機能の分類と組み合わせの重要性については、「情報」という観点から考えてみたい。「情報」は談話の種類によって位置付けが異なる。勧誘の談話では、勧誘者は勧誘に対する応答（承諾、拒否等）を得るのが目的であるため、情報を提供し、被勧誘者の反応（消極的、積極的等）によって情報を変えていく。一方、本書の相談の談話では、回答者は医師等であり、専門知識が相談者よりも圧倒的に多い。相談者は回答者から情報を得るのが主な目的であるが、回答者が情報を提供したり、相談者が情報を正しく理解するためにその回答について質問をしたり、確認したりするという点が勧誘の談話とかなり異なる。本書では相談の談話の特性から新たな発話機能の組み合わせの必要性に気づき、勧誘の談話の〈情報提供〉と〈情報要求〉の発話機能を相談の談話に応じた新たな発話機能に変更したことが高く評価できる。

本書の相談の談話はラジオの①医療相談と②心理相談、③図書館レファレンスの図書館員と学生の談話であるが、これは Drew & Heritage(1992)の‘institutional discourse’（制度的な談話）であり、日常会話より組織（話者交代等）が制限されるという面がある。また、南（1983）の談話単位を認定する手がかりの中の「参加者」「媒介」「全体的構造」の観点が日常会話と異なっている。参加者は、資料①と②は医者と患者で、①は相談番組の司会者が相談内容を代弁、③は図書館員と学生である。また、①と②はラジオを媒体とするため聴取者もあり、時間制限やラジオ番組編成が相談の談話の全体的構造に影響している。これらの要素によって相談者や司会者、回答者が一方的に話すことも考えられる。①の「B-1. 相談提示の小話段」で相談者を代弁する司会者が単独で発話することもあり、「C-1. 回答提供の小話段」で回答者が情報を提供するのに対して相談者が黙っていたり、相づちのみ打っていたりすることが多い。そのため、全体的構造が認定しやすく、談話型が4種になったと考えられる。また、話がモノローグ的で書き言葉寄りのために機能文型が提題表現+叙述表現の「文型」として記述できたとも考えられる。その点ではより自由なやりとりをする日常会話とは異なるが、日本語教育に応用しやすい資料であるといえる。本書の別冊の『相談の談話資料集』は、対象の談話資料がすべて精密に文字化されており、モノローグ的で書き言葉に近い文からなる談話資料は、聴解教材に使用しやすい。また、談話型や話段の多重構造が会話教育にも応用でき、必要な語彙や機能文型を組み立ててレベ

ル別に提示する教材に向いているという点で、日本語教育に貢献することが期待される。

本書は、将来発展させる課題が多く、日本語の談話分析と日本語教育等に広く影響を与えと考えられる。日本語の談話研究を深めるには、多種類の談話を分析する必要がある。例えば相談の談話では、友達同士の相談の談話の分析も考えられる。その中では情報だけではなく、同情、慰め等を得るというラジオ等の相談の談話と異なった目的もあろう。現在、実際の談話を精密に分析した研究は少ない。今後本書の方法論を用いて他の種類の談話分析が可能になる。その際、本書の資料収集や文字化等の記述方法、発話機能、機能文型、大話段・話段・小話段の全体的構造を作る単位、談話型を導入してより精密な記述が可能になるだろう。

また、本書がさらに深く理解されるには、日本語の文章論や文法論等の基礎知識を踏まえて、発話機能と機能文型の定義と認定基準のほかに、認定しやすい例だけではなく、認定しにくい例も対象とし、認定について詳しく説明する必要がある。それにより、多くの研究者が類似した分析ができ、本書で示した分析方法が広く評価され、本書に沿った研究が発展していくことが期待される。

今後、本書の研究成果を日本語教育に応用するには、次のような可能性が考えられる。相談の談話の文字化資料を用いた聴解教材が作成できる。また、会話教材のための発話機能の文型をレベル別に整理し初級から上級への相談の談話の運用練習の教材も作成できる。その際、談話の全体的構造や話段の多重構造を踏まえて、話段毎の練習をしてから全体を練習することもできる。さらに、日常会話とは異なる医者－患者、図書館員－学生等の関係も取り入れた異なる役割の参加者間の練習もできる。また、本書のラジオ番組の医療相談の「B・1.相談提示の小話段」における司会者が相談内容を代弁する練習も取り入れることで、代弁する際の独特の機能文型（相談者「下痢が、止まらないんですけども。」↔司会者「下痢が、止まらないということなんですかんですけども。」）も習得できるだろう。

以上、本書は、日本語学と日本語教育の将来に向けて、今後大きな展開の可能性があると考えられる日本語の談話研究の必読文献である。

参考文献

- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』国立国語研究所
 佐久間まゆみ(1987)「文段認定の一基準 (I) —提題表現の統括—」『文藝言語研究 言語篇』11 筑波大学文芸・言語学系
 佐久間まゆみ(1997)「第8節 とりまとめる」佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『文章・談話のしくみ』おうふう
 佐久間まゆみ(2002)「接続詞・指示詞と文連鎖」仁田義雄・益岡隆志編『日本語の文法 4 複文と談話』岩波書店
 佐久間まゆみ(2006)『「日本語機能文型」教材開発のための基礎的研究 早稲田大学日本語研究教育センター 2005年度重点研究 研究成果報告書』
 ザトラウスキー, ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
 ザトラウスキー, ポリー(1997)「第10節 かかわりあう」佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『文章・談話のしくみ』おうふう

南不二男 (1983) 「談話の単位」『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 I』 国立国語研究所
Drew, Paul & John Heritage (Eds.) (1992) *Talk at work: Interaction in institutional settings*.
Cambridge: Cambridge University Press.

(ぼりー ざとらうすきー ミネソタ大学言語学研究所)